

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年
11月号
通巻615号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



※宇賀部神社は小野田さんの本家筋

◀小野田寛郎さんのメッセージ

私は戦場の三十年間、生きる意味を真剣に考えた

戦前、人々は命を惜しむなど教えられ、死を覚悟してしまつた覚悟しないで生きられる時代はいい時代である

だが、死を意識しないで日本人は「生きる」ことをおろそかにしてしまつていないだろうか

目標を持って日々、希望に胸を膨らませて人生を送りたいものです



宇賀部(おこべ)神社(和歌山県海南市)

和歌山県岩出市 森脇聖淳さん撮影(文・8頁)

昭和42(1967)年11月23日 月次祭法話より

トランスの役目 ～現界と霊界の間に立って～

法主 矢追日聖(満55歳)

感謝の意味を考える

いいお天気で、今年の大倭のみみじも一段と色が映えております。今日は勤労感謝の日というせっかくの祝日ですから、やっぱり何か考える機会にしたらいいかと思ひます。

ここでは毎月二十三日が月次祭であつて、別段、今日の祝日と関係あるわけはありませんが、「感謝」という言葉から考えてみると、日々私たちは勤労に対してだけではなく、物事全てに対して感謝することが必要だと思ふんです。

でも、恩を受けたからそれに対して報いるとか、また働きに対して感謝するというだけの意味なら、世間一般では当たり前のことではありません。

本当の勤労感謝とは、自分が働かせてもらっている現在の健康に対して喜びを持つことです。病気で働けなければ苦痛が出てくるわけですから。

その時に、私たちが意識していないところで受けている大きな恩がたくさんある。その第一は生かされていること。私が毎日、一番感謝しているのは人間に生まれてきたことです。これは感謝と言うよりも、むしろ本当の喜びを持つということなんです。

人間として生まれる奇跡

今の人たちは経済やの生活設計やの、やれ産児制限だ妊娠中絶だと頭で考え

なっているだろうと思います。

昔の古いバイブルとか仏教の経典をそのまま鵜呑みにして、キリストの教えはこうやの、釈迦の教えはこうやのと押し付けるのは時代錯誤と言えるでしょう。

天地自然の真理を感応する

私は「神ながら」という言葉を使いますが、裏に流れておる真理として、キリストの言われる中にも神ながらがあり、釈尊の言われる中にも神ながらがあるわけです。

私の場合、教えというよりも、天地自然の中に流れておる神ながらの靈威、靈的な動きというものを自分が肌を感じたまま、つまり感応を話しているだけです。経典もバイブルも読まない。こういうような立場は天啓宗教とか言いますけども。私がいつもしゃべっている内容を経典みたいな形に仕立てて百年、五百年も経てば、大倭教の正式な経典になっているかもしれない。しかし、現在の社会を相手に今しゃべっておることを、矢追日聖は昔こう言うたからと、百年後もそのまま押し付けたら、ちよつとまた加減が悪い。

キリストや釈迦の場合、二千年三千年前の話になりますが、その人たちの天地自然の中からつかみ取った靈的感応と、今私がかみ取る靈的感応は同じことです。だから大倭の神ながらの宗教の行き方は、キリスト教であろうと仏教であろうと教派神道であろうと、何ひとつ区別しません。

教え方、説き方、広め方は時代によって違いますが、全部、人間の言うた教えです。キリストも言うても人間だし、釈迦も言うても人間だし、また矢追日聖と言うても人間だし、同じことをしゃべっている。誰が偉い、誰があかんということじ

やない。あなたたちだつてみんな誰が偉い、誰があかんということじゃない。それと同じです。その教えの根元をたどっていけば、キリスト教でも仏教でも神道でも、天地自然の変わらない真理に行き着きます。

元々から実在する教え

大倭教と言っても、私が作ったもんじゃなし、私が考えたもんじゃなし。何億万の昔から天地自然の中に流れておるひとつの動き、法というものを私を感じ取って話しておるだけです。大倭教の教えであるとは言えません。大倭教そのものは宗教でも何でもない、ただの名称です。矢追日聖という人間が、こんな宗教的な仕事をするために着ているだけの法被に過ぎません。

私が言わんとする宗教的内容というものは、何億万の昔から実在しています。私が発見したんでもない、元々からあったものです。

それを私が中間の役目、例えばたら電気のトランス(※)のような形で、あなたたちがわかるように言い換えているだけ。天地自然から受ける感応は私だけがわかつているものであつて、そのまま知らそうと思つてもできない。(※トランス：変圧器の通称。電気を需要に合わせた電圧で供給するために、元の電圧より下げる、または上げる際に用いられる機器。家庭近くの電柱など、身近な場所にも見られる。これは発・変電所から送られてきた数千ボルトの高電圧を100ボルトの低電圧へ下げ、各家庭へ供給する働きをしている)

だから私がどんな立派なことを言つたつて、「あの人は偉い人や」と思つたら大間違い。今言うたように宇宙の真理を、ボルトを変えてあなたたちに流しているだけのこと。自分で感じたまま

を伝えておるだけで、私自身は何ひとつ研究してないし、ちつとも偉くない。

つまり、犬の鼻が効くのと同じような能力を私がつ持っているだけです。猫は夜中でも目が見えるけど、人間は夜目が効かないから猫は人間より偉い、とあなたたち言わんでしょ。けれども世間では、靈的なことをちよつとと言うとね、普通の人がわからん未知の世界やから、偉い人やと思ひ込んでしまふ。

言わば、天地自然の世界と人間の世界の真ん中に立つガイドの役目が私なんです。いろいろな相談とか受けて靈的な障害があれば伝えてあげますが、これは私が生まれながらにして持つておる能力です。そんなものがわかるように生まれ合わせとんねん。魚が水の中をサーアと泳ぐのと一緒や。難しいも何もあらへん。アヒルはスウーと水に入るし、鶏を水に入れたら沈んでしまふ。誰にでもその人その人としての能力があるんやから、自分が偉いというようには思ひません。

もし、天地自然の心に逆らうようなうぬぼれ増上慢、あるいはそういう行為があれば、私の場合には命がない。天地自然、靈界に心臓でもキュツとひねられたら、瞬間にパタツと死んでおしまいです。他の人は知りませんよ。真面目に靈の世界のことを人間の世界に伝えなきゃならない宿命が私にはあります。

余談になりますが、同じようなこと言うてる人がおつても、そういう宿命のない人は使命が違うんや。少々人をだまそうが悪事を働こうが別にバチも当たりません。でも私の場合は許されけない。世間からはクソ真面目みたいに言われますけども、私にしてみれば辛いこともないし、クソ真面目にやっているつもりもない。当然のことを当然としてやっているだけなんです。

肉体がなくても同じ人間

私はいつもね、ご利益ご利益と神さん仏さんに手を合わせて拜む、自分だけが幸せになろうと思う、こんなもん強欲心だと言います。この神さん仏さんというのは本当の親神さん、天地自然を指して言ってるんですよ。宇宙を生み出し、宇宙全体を司る、宇宙の根本エネルギーですわね。

ところが昔から、神さんを拝んだらうまくいくと言う人がずいぶんいる。病気やから助けてくれとか商売繁盛さしてくれとかね、会社の屋上にお稲荷さん祀ったりしてゐるわな。

確かにこれはご利益あるんですよ。それはね、相手が今まで話してきたような本当の神さん仏さんとは違うからです。お宮さんなんか祀っているのは肉体のない人間。肉体を持つ我々は現界において、肉体を持たない人間は霊の世界において、お互いに仲間同士です。

例えば体の具合が悪いなら、現界であれば医者のお世話になるでしょ。肉体を持たない人間でも、その能力のある人やったら助けてくれますよ。ただ肉体があるかないかというだけの違いであって、どっちも同じ人間です。霊界でも我々と同じように感情を持ち、飯も食うとる。本読んでる人も、彫刻してる人も、けんかしてる人もある。現界と同じことをやっています。

我々の力でどうにもならんとか思い余ったりする時、霊界人に頼んだら手伝ってくれますよ。人格霊とか人格神とか言っても、相手は人間やもん。今ここでも光明皇后さんや弓削道鏡さん、蘇我馬子も出てくる。偉い人ばかりや。もし肉体を持っている人だったら、こっちは小(こ)さうならんといかんとこやけれども、そういう姿の見えない人

たちを大倭の仲間に使っています。だいたい、光明皇后さんが親分ですからね。親分の光明皇后さんと相談して、現界と霊界の人が寄り合うて一緒に仕事していくことになっています。

狐や狸の霊でも、商売や病気のこともくらい頼めば聞いてくれる場合があります。猫を飼えばネズミを捕ってくれるし、犬を飼えば夜中に人が来たらほえてくれるやろ。霊体の場合でも同じ、狐や狸を祀れば力になってくれますよ。

だから祀っても悪くない。悪くないけれどもね、目に見えない者に頼んでご利益があったら、もう神さんやと思つて頭下げて祀る、その考え方は間違いです。おそらくみんな、そのところの区別がついてないと思う。

宗教のご本尊は超人間的な宇宙の神さんだと言い、釈尊の悟りの境地を仏の世界だと言う、そう言う場合の神さん仏さんとは違います。

天地自然の心に沿う精神内容

我々はまず宗教的向上を目指していくこと。そのために天地自然の心にできるだけ添うたような生活の仕方をしていく。

一例ですけれどね、人間の上下の歯を勘定したらいい。野菜とか、米や麦や豆とかの五穀をかむには臼歯ですわね。臼歯が何本あるか。肉類をかむのは犬歯。植物性のものと動物性のものをどの程度食べばいいのか、適した歯の数によって考えたら、肉体を維持しておる食事の問題においても、天地自然から何をどれだけ人間が許されておるかわかります。それが健康であるという第一条件です。ところが野菜はさっぱり食わん、肉ばかり食うライオンみたいな食事していると、人間の本質的なものが欠けてくる。

天地自然の心に沿うた精神内容の人間が一人でも増えていけば、理想の社会ができてきます。仏教では弥勒とか浄土とか言いますね。まあなかなか先の長い話ですけど、今からみんなが心掛けていかなきゃいけない。

求めずとも向こうから来る

(※昭和二十年の立教開宣から)二十年の間はここで引っ込んでいましたけれども、いよいよ昭和四十一年から「言向矢放す」年がきた、四十二年から外へ出て行くと。霊界の動きから見ると現界の動きがまるで計画通りみたいなんです。いよいよ地方にも出て行かなければいけないと思つておつたんですけれども、皮切りに十一月二十四日から金沢の方へ参ります。向こうで会場を三、四ヶ所用意してあるらしい。こちらから求めなくてもぼつぼつ向こうから来る動きになっています。

求めずとも来る、いつも私が言う神ながらの原理です。来月十二月九〜十日には紀州方面ですし、また来年以降もだんだんと出て行くと思います。

大倭のひとつの霊団があり、その分家に当たる霊界人が地方にあります。その霊界人同士が話し合つて、何かの人間関係をもちた現界人がその地区へ来てくれと連絡をするような事態に自然となつてくる。大倭を中心として全国に姿のない人間たちが裏の方で動いております。

この祭典の日は紫の雲がいつもたなびきますが、今日は紫の雲が渦を巻くように流れておりました。やっぱり地方教導が始まるんだなあと、思いを新たにしておつた面があります。

みなさん方もひとつ、本質的宗教に立脚して、大倭を中心としてみんなが人間的に向上を図つてもらいたいと願っています。(文責・編集部)

「神通力如是」の真意をさぐる

第十六回

大倭教の源流にさかのぼって

じんずうりきによぜ

今回の原文は、前回の昭和16年11月13日の神話の続きです。前回に現代語訳を載せられなかったので、今回の分と一緒に追加しました。結果として、奇稲田姫、武甕槌等のやり取りがより理解しやすくなったと思います。

原文

同日、午後七時、於鳥見庄山

「倭姫、オン前慎シミ、神楽ソウシ申サン。拙ナキワザニテ候ヘドモ、イマシバシオユルシアレ」手舞、題目、、、、。

「吾ハ大倭トビノモリ、奇稲田姫ナリ。倭姫、日日神楽舞ヒ、吾ヲ慰メクレル、禮ヲ申ス。今シバシ時ヲ吾ニクレ。」

皆ノモノヨク承ハレ。我が日本ハ閻ナルゾ。コノ閻押開キ、安ラケク、平ラケク、八百萬ヨノ神等ト、共ニ歡喜セン世ヲ迎ヘルニハ、正法、眞ノ妙法トナヘ候ヘ。妙法トハ佛教デモ神ながら(惟神)デモナイ、宇宙ノ大真理。コノ大真理ニソムクモノ悪魔ト変化ナシ、吾ガ日本ヲ襲フナリ。コノ悪魔怨敵退散ノ妙法トナ

へ、各々仕事ニ精ヲ出シ、ヒマアル時ハ、悪魔怨敵退散ノ眞ノ題目唱ナヘ候へ。吾レトモ二天上ニ於テ八百萬ヨノ神等トトモニ唱ヘルデアロウ。オ題目、、、、。倭姫ジャマヲイタシタ。神楽ノツツキソウシテクレ」

「倭姫、恐入り奉リマス。心カラノミ神楽、フツツカナルワザニテ候ヘドモ、奏シ奉ル。手舞、題目、、、、。

我が日本ニアダナセル、悪魔怨敵退散ノ題目、ミナミナトモニ唱ヘ候へ。天上ニテモ一八百萬ヨノ神等モトモニ唱ヘラレテ候。題目、神楽。」

君ガ代ハ一千代ニ八千代ニ壽ギテ、大内山ノ色ハエテ竹ノ園生ノフカミドリ、大内山ゾ榮エユク。オ題目、、、、

「神楽、マヒオサメ候。拙ナキワザニテ候ヒシガナニトゾオ許シアレ。倭姫オイトマチヨダイ仕ル」

「吾レハ、大國主。」

吾レ妙法ノカニヨリ、麻ノ如クニ乱レタル、コノ世ヲ立直サンガ為、八百萬余

ノ神等カラ命ヲウケ参ツタ。武甕槌命、ヨクゾ参ラレタ。シンノ妙法エトクシ、ホウシヤウノ兜ヲ頂キ、吾ガカニナリクレ。オワカリ申サレタカ。汝ハ眞ノ妙法トキチガヒシゾ。眞ノ妙法ハ惟神デモ何デモナイ、宇宙ノ大真理。ヨクヨクエトクセラレヨ。オワカリ申サレタカ、武甕槌命。

(タケミカツチ命、惟神、國体を説く座にありし國井道之に憑りて)

ソレハ其レデヨイ。ソコニ因縁因果ノ輪廻ガアル。オワカリアリシカ武甕槌。吾トモニ妙法トナヘ吾ガ日本ヲ立テ申サン。トモニ題目トナヘ候へ。南無妙法蓮華經。武甕槌命、オワカリ下サレ、大國主ウレシク思フゾヨ」

(タケミ「御安心ナサレマセ」)

「汝ハ武ヲ以テ、妙法ノ兜ヲ頂キ役目ヲ果シ下サレ、オ頼ミ申ス。」

(タケミカツチ神、自己ノ性ヲ語り大國主命ニ誓ハル)

ヨクゾ申サレタ、吾レトモニカトナツテ眞ノ妙法ヲ唱ヘラレ、世ヲ立テナホサム。サラバ、オサラバ」

(武甕槌神大音声にて題目を唱ふ)

神代ヨリ 光ゾ代代ニカガヤキテ

キエシタメシノ ナキシ日ノ本。

(タケミカツチ命)

註 釈

① 妙法

「深遠微妙なことわり」、「正しい理法」、「すぐれた教え。仏の教え。尊い教え」(東京書籍『広説佛教語大辞典』による)。「最も勝れたる法」「妙なる法門」(平凡社『大辞典』による)

以上が「妙法」についての一般的な理解であるが、「神通力如是」の中の大きな主題でもあり、その主題に一步でも迫るために法主の著作の中から参考となる部分を抜粋し、載せておきたい。また併せて本文で後述される註釈の「ソコニ因縁因果ノ輪廻ガアル」の意味を考える一助としたい。

以下は法主の文章、「一大事の因縁 血縁と地縁の神秘」に表された法主の父隆藏が人間として納得しがたい魔神との対決をへて、ジョウ(隆藏姉)による妙法の功德力を知っていくくだりである。

《隆藏 ……病気にさすわ、命はとるわ、金は無くすわ、商売は損させるわ。それにどあつかましい、「大和へ帰って神に仕えよ」って、一体これは何事や、あべこべの言い分じゃないか。わしは、人としてただの一度でも人倫の道はずしたおぼえがないのに、神罰なんか当たる道理がない。魔神が邪神か、家を焼く甲斐性があるなら焼いてみたらいいやないか。

ジョウ 隆藏え、腹の立つのはあたりまえやがなア、人間は凡夫やから、神の心は分かり難いところがあるのやでエ、常識や理屈では分らんところ

があるのや。

国子先生(※遠山国子・神通力に優れた法華經の行者)は、おきてやんに憑ってお弓さん(霊体、弓大明神)が、おかはん(キシ)にお告げしやはったことは一つも間違っていないとおっしゃるのやでエ。

隆藏 それでは、たいていのことはお弓さんの言いなりに実行したのに、なんで現罰を当てるのや。ジョウ さア!! それやが、大事なことは。それが隆藏には分からなかったから現罰があつたのや。然しなア、隆藏え、法華經を信仰する私の口から言うのやつたらなア、どんな偉い魔神が現罰を当てようと思つても、それを受けて苦しむような宿命がなかったとすれば、現罰は当てられないことになっている。そうした神の定めを「妙法」と言うのやでエ。隆藏の親や、隆藏の夫婦また子供が、そうした苛酷な仕打ちを受けなければならぬ過去世からの宿縁、一大事の因縁をもつてこの世に生まれてきたのやでエ。そんな深い仕組みは天狗道では分からないから、天狗さんは得意になつて次々と現罰を当てることできたんやでエ。

隆藏の家族も、この天狗さん達も一丸となつて真の「妙法」の功德力によつて解脱しなければならぬのや。今がその「時」やないか、時が来たのやでエ。

隆藏 姉さん、何かしら分かるような気がしてきた。実はなア、お貞(フジエ)の「あんたが庭を耕じさえしなかったら、幸子は死なないですんだのに、旦那さんが幸子を殺したんや」という独り言を時折聞くことがあるのや。その度に肚の底が煮えかえる思いで責めるものがあつたんやが、それは幸子が十歳で死ぬ宿命で生まれていたと考えてええのだんなア。

ジョウ そうですがな。人は皆その人なりに因縁

をもつて生まれていますから、言わば私らは盲目で神の仕組んだ芝居を演じている役者みたいなもので、それで善悪不二とか邪正一如の仕組みを法華經には説かれていたのやでエ。

隆藏 お蔭で、姉さん、いま「しこり」が一つ取れました。《「ながそねの息吹」69〜70頁》

② 「惟神」と「かんながら」

「神ながら」にわざわざ(惟神)の表記がある事に注目されたい。

「惟神」とは、この時代一部の軍人や思想家が自分達の軍事的、政治的方針に従つて都合よく唱えたものであり、すでに戦前においても法主が唱えておられた「かんながら」とは異なるものであつた。次にその法主が言われる「かんながら」についての文を引用する。そしてそこにも「ソコニ因縁因果ノ輪廻ガアル」に対しての参考となる記述が明記されている。

《靈界ではその時その時に、或いはその時代時代に応じた中心のもとに、縦に横に秩序整然とした不可思議な統一組織体ができいて、それは到底人智の及ばない誠に微に入り細にわたつて安穩な相對即一体的な動きを伴う平和世界である。

靈界は常に現界の社会も絶対平和なこうした姿に近づける方向へと、徐々刻々に働きかけているのである。法華經ではこの「神ながら」の法を甚深微妙の法といつて「口の述ぶる所に非ず、心のはかる所に非ず」と美しく逃げてゐる。アジアの大聖者釈尊のような智者でも説明は難事であつたように見受けける。《「やわらぎの黙示」103〜104頁》

③ ホウシヤウノ兜

シヤウシヨウ。ホウシヨウというのは、「奉詔(みことのを受けること)」、または「法性(宇宙万物の共有する不変・平等無差別な本体)。

あらゆる存在の真実なあり方」(三省堂『大辞林』による)

どちらともとれるが、後段で大国主の言葉として「妙法ノ兜ヲ頂キ」とあるので同様な意味で使われていると思われる。真の妙法を会得した上で真理を体現し、武というタケミカツチ神自身の使命を果たしてください、という意味であろう。

④ソコニ因縁因果ノ輪廻力アル

因縁とは結果を引き起こす直接の内的原因である因と、それを外から助ける間接的原因である縁のことで、仏教ではすべての生滅はこの二つの力によると説かれている。因果とは原因と結果のことで、仏教では六因、四縁、五果を以って一切の因果関係を説明している。輪廻も仏教用語で回転する車輪が何度でも同じ場所に戻るように、衆生が三果六道の迷いの世界に生死を繰り返すことを言っている。(小学館『日本国語大辞典』による) 法主はこのことについて次のように書いているので引用したい。

《霊界の動きは、何かの形で現界に反映する。

我々の人間社会に於いてはそれは宗教、思想、政治、文化、対外関係等といったものが組み合わされてその時代の社会を形成してゆくようであるが、その多くの場合その社会に生存する人達はその神からの流れに流されつつも、この流れに知らず識らず逆らうような人間的計らいで押し進めてゆくものである。霊界はまたこうした人間社会の各種の現象によって動きの変化を起こすもので、簡略に言えば霊界に在る「因」は現界にその「果」となって顕われ、現界に在る「果」が「因」となって霊界はその「果」としての動きとなる。こうした因果関係が無始無終に繰り返している。小さく人間一人一人は勿論のこと、犬猫等の動物や一木一草に至るまでも同じ動きを具備しているもの

である。》(『やわらぎの黙示』104頁) ⑤自己ノ性ヲ語り

性(シヨウ)とは:

- ・先天的な性質。生まれつき。性状。たち。(仏教)外的影響・関係の如何によらず、常に同一である本質。「仏性・見性」(『広辞苑』による)
- ・中にひそむもの。(学習研究社『漢和大学辞典』による)
- ・こころ。精神。(大修館書店『新漢語林』による)

※ここの武甕槌神(命)と大国主命の関係性について簡単にふれておきたい。

通常の日本神話に於いては、武甕槌神は天照大神の命を受けて出雲に降り、事代主神・建御名方神を服従させて大国主命に国譲りをさせたということになっている。ところがここでは大国主命と武甕槌神との関係は完全に逆転しており、武甕槌神が大国主命に服従した上で「自己の性」を語っている。大国主命はそれに対して「ヨクゾ申サレタ」と共感している。

現代語訳 (第十五回・第十六回併せて)

十一月十三日 午前十時 於鳥見庄山

※妙月に憑って「私は倭姫、拙い舞ですが奇稲田姫様の前でミ神楽を舞いましょう。(題目:...) あーあーあー。多くの島々から出来ており、秋津嶋といわれるこの日本はいついまでも栄えていくでしょう。(題目:...)」

これで神楽舞を終わらせていただきます。拙い舞をお見せ致しましたが、お許しください。私はこれで退席いたします」

附言(付け加え書) この日は鳥見庄山における「妙月の神語り」の

場に武術家・國井道之が同席する。この人に武甕槌命が憑った。この憑っている武甕槌命に対して、大国主が法主を通じて、鹿島の武について説かれた。それは「鹿島の武」は真理にかなうものであり、その学術、武術両面共に真理にかなうと。國井道之の談として、昨夜(12日夜) 武甕槌神に起こされて静座すると南無妙法蓮華経の哲理をお説きになり、これは宇宙の真理であるとおっしゃいました、という。

「世の中は今、秩序が失われて乱れている、守るべき人の道を歩まれているスメラミコトの生き方は変わらない」

「人としてあってはならない世の中であるが、変わらぬ歩みをしてこられた代々のスメラミコトの道をもつて神代の時代のような世に戻したいものだ」

『国策遂行には先ず側近の好をばらえ』太字に出る。

以上のことを國井道之に憑った武甕槌神が宣べられた。(以上第十五回目的の現代語訳)



▶法主の妻、妙月(昭和25年帰幽)

▼大倭神宮齋庭で古武道奉納試合、右が國井道之氏



同日 夜七時 鳥見山庄

倭姫「倭姫、奇稲田姫様の前で慎んで神楽を舞わせていただきます。拙い舞ではありませんが、しばらくの間お許しください。(手舞、題目)(※突然舞の途中で割り込む形で奇稲田姫に入れ替わる)奇稲田姫「私は大倭神宮の奇稲田姫である。倭姫よ、日々神楽舞で私を慰めてくれ、お礼を申す。しばらくの間、巫女・妙月を私に使わせておくれ。

この座にいる皆の者達よ、私の言うことをしっかりお聞きなさい。今日日本の世の中は乱れて治まっていけない。乱れているこの世を立て直し安心して平和な国として大倭太加天腹の八百万代の靈人達と共に歓喜しあえる世にするため妙法を唱えておくれ。妙法とは仏教でも、惟神(神ながら)でもない、宇宙の大真理のことである。この大真理の流れに背を向ける者は悪魔となって日本に危害を及ぼす存在となる。このような悪魔を退散させるために妙法を唱え、各々仕事に精を出し、暇のある時は悪魔怨敵退散のための真の題目を唱えなさい。私も靈人達と共に唱えます。(お題目……)

倭姫よ、舞の途中で時間を取ってしまった。舞の続きを始めておくれ」

倭姫「もったいない事です。ふつつかですが心からのミ神楽を始めます。(手舞、題目)

日本を害する悪魔怨敵退散の題目を皆さん共に唱えてください。奇稲田姫が言われたように、霊界でも靈人達と共に唱えられています。(題目、神楽)

スメラミコトのおられる世は有難く、その皇居である鴫の杜は色映えて榮えてゆく。(題目……) 神楽舞を終えました。拙い舞をお許しください。倭姫はこれで退席いたします」

大国主「私は大国主、私は妙法の力のもとで麻のごとくに乱れている現界の流れを立て直すために、大倭太加天腹から使命を与えられて鳥見山庄での妙月(スズメ) 御示顯(現)の場に参った。武甕槌命よ、よくぞお出でになった。真の妙法を会得し、ホウシヨウの兜を頭に頂き、私の使命を助けておくれ。解ってくれましたか。あなたは真の妙法の意味を誤解しているぞ。真の妙法は惟神でも何でもない。宇宙の大真理である。このことを充分理解してください。

武甕槌命よ、解っていただけか」(※この時同座している者たちに、自説の惟神論、國体論を説いていた國井道之にタケミカツチ命が憑っていたのでその言を武甕槌命の言葉として大国主が話しかけておられる場面ではないかと思われる)

武甕槌命が言っていることは、それはそれでよろしい。現界に現れてくる全ての事は因縁因果の輪廻の理がはたらいている。武甕槌よ、この理を納得できるか。私自身も共に妙法を唱えて日本を立て直す。一緒に題目を唱えよう。南無妙法蓮華経。武甕槌命よ、あなたは納得してくれた。大国主はうれしく思いますぞ」

武甕槌「ご安心ください」

大国主「あなたは武をもって妙法の兜を授かってあなたの使命を果たしてください。お願いします。(武甕槌命は己の魂の真実を語り大国主に自らの使命の実践を誓われた)

大国主「よくぞ申されました。世の立て直しの力となって、あなたと共に真の妙法を唱え、世直ししよう、さらば、おさらば」

(武甕槌神大音声にて題目を唱える)

武甕槌命「大倭大国魂大神に始まる日の本に発せられ加美の、み光はいつの世にも消えた例は無い」(以上第十六回目の現代語訳)

表紙写真について

▼森脇聖淳 和歌山県岩出市

今年喜寿を迎えました。物を探す時間が増えました。昨年、古事記・日本書紀にしえの物語からたどる「わかやま日記の旅」周遊スタンプラリーに挑戦しました。その中に和歌山県海南市の宇賀部神社があります。訪れた時は紅葉の時期でも綺麗でした。お参りを済ませスタンプを押印して車に戻りました。次に行く所は? メモ帳がないのに気づき、来た道に戻ります。拜殿にもありません。ふと内ポケットに手をやるとありました。その後、湯浅御坊までの五箇所を廻り何とか予定の行程を終了しました。

▼杉本順一

思い再び、戸畔のお二人

森脇聖淳さんから頂いた写真を見て、二人の女性を思い出した。一人は名草戸畔、もう一人は丹敷戸畔と言われる。名草戸畔は平成11年に、丹敷戸畔は令和元年に、このお二人の魂魄の地を訪ねた。それぞれ『おおよまと』にも書いたのですが、ここからの抜粋や要約でお許しいただきたい。

*

・名草戸畔のこと

平成11年3月号「五里霧中頭幽記」より
《『日本書紀』第三の「神武天皇」を見ると、「名草戸畔」という者を誅ふ。又、「丹敷戸畔」という者を誅ふ」とあるから、二人共戦で殺されたらしいことが分かる。》

《津名道代さんは野草社刊『自然生活』第六集「奥上林の燎火」に、次の様に書いておられる。

「天つ神」神武の侵攻に抵抗した紀北の先住族女酋長「名草戸畔」にもちよつとふれたが、そのばらばらにされた屍体をひそかに葬ったという伝説の社が、古の名草郡域（現・和歌山市と海南市および海草郡）に、四つある。みな小さな「村の鎮守」だ。表向きの祭神はむろん別にある。重根の千種神社は足を、坂井の杉尾神社は胴体を、それぞれ埋めたという。二千年後の今も「あしがみさん」「はらかたさん」と親しくよばれ、紀州人の信仰が篤い。頭を葬った「おこ（う）べさん」（海南市小野田の宇賀部神社）、残る一つは和歌山市木枕の足守神社。》

《では四つの神社のどこへ最初に行けばいいのだろうか。》

宇賀部神社を見つけたら「ココニキテイタダケレバ ミチワツナガリマス」と言う。ではここへ行こうと考えたら、「ウツシヨノコト ヨロシクオタノミシマス」とも。

行くべき所は分かった。和歌山行きの話を湯浅晴子さんにしたところ、なんと「あじさいの箱」の和歌山の仲間が現地を案内して下さるという。

岸田哲さんに乗せてもらい奥さんの文子さん、娘の若葉ちゃん、井手泉さん、そして私達夫婦の六人で大倭を出発。阪和自動車道の海南東で永廣憲昭・弘子夫妻とその友人中野美栄子さん達が私達を迎えて下さった。

宇賀部神社に到着し、鳥居をくぐり少し行くと割と急な階段があつて、登りきった所がもう拝所の中になつていた。さっそく全員で静かに手を合わせた。「やっとお訪ね出来ました」という思いで合掌していると、「法主様にお会い出来たことまことにうれい」という心が強く伝わってくる。

この日の昼食は永廣さん達の「好意で山菜弁当を用意して下さいました。この弁当は箱の下にあるヒ

モを引くと熱せられて自動的に温かくなるというすぐれもの。私の人間「ころがちらりと顔を出した。せつかくの温かい弁当が、お供えしてある間に冷えてしまつてはもったいないなあ」と心ひそかに考えてしまつた。

皆さんもどうぞと心に念じてから自分の場所にもどろろとしたら、どの御霊人かは分からないが、突然「さげてもらつてけつこう」と感応。私の心は霊界人達にはお見通しであつた。

霊界人達には形で通じるものでなく、心が先であると言ふ次第である。誰か一人でもこのことを知つて下されば、私の恥もかきすてにはならぬいんだけれど……。》

《次の千種神社に車で移動する。社殿でお参りしていると「オオヤマトタカマノハラニムカエル」と言われる。宇賀部神社と全く違う感応である。私達が神社から神社に移る間に、もう霊界での手続き（？）はすんでいるのであろう。「霊界には時間はない」と聞かされた法主様の言葉を思い出す。次に杉尾神社のお参りに向かう。》

・丹敷戸畔のこと

令和元年12月号「大倭会文化行事報告」より《丹敷戸畔が討たれた時には、未だ神武天皇は狭野命と言つた。西（九州）の王族四人兄弟の末っ子だったが、一人生き残り紀伊半島の熊野に上陸した時のことであつた。この後もいく度かの戦があつて、後に狭野命は神武天皇として即位した。しかし丹敷戸畔の暮らしていた地元には、今も四ヶ所も墓がある。歴史は常に勝者が前に出る、敗者は常に影の存在となつていく。》

「丹敷戸畔」の慰霊は当然、文化行事のお役目でもある。私はこの度の旅行目的が決まつたことで、念のため「丹敷戸畔」さんに今のお気持ちを

お聞きした。

8月8日のこと――

「トベノミニナツテミナサレ イトイタキモノニテ ワレミヲモチテ コレホドノ イタキヲシラズ ココロウシナウナリ タマシイニ モドリテ ソノクノミニノコシシモノナリ
ワレヲイタワリタマウナレバ ミノクルシミヲトクココロモチテ コラレヨ」

まさかこんな長いお言葉があるとは思わず、あわててメモをした。皆さんならこの電報(?)をどのように理解されるでしょうか。

私には「戸畔の身になつてみてくたされ 大変な痛みで 生きている時にこれほどの痛さは 経験したことがない 気絶してしまつた そのまま死んでしまつても その激痛の苦しみだけが 残つてしまつた 私を労わつてくたさるのなら 身の苦しみ(痛み)を取り除く心で 来て下さい」と思いました。

二千年もの間この苦痛だけの世界(幽界)におられたことを想像して下さい。法主さんが教えてくたさつた、「人間死ぬ時の気持ちが大事やゾ」を思い出す。

丹敷戸畔を慰霊するために、「形をもつて慰霊の心を表す」と教えられたことを思い出しつつ、是非、昼食前に車中の皆さんに丹敷戸畔の悲痛な苦界のことを分かつて貰おうと、このことをお話しした。昼食の時には、各自が心から丹敷戸畔さんに思いをこめて先ずお供えしていただいた。》

*

今回改めて思うのは、私達の慰霊の旅は決して独り善がりのことではなく、まさに法主さんから教えていただいた「奈母太加天腹」の言葉の力と、「顕幽不二 還元帰一」の八文字の意味の証しであつたと思えるのです。

あじさい日誌

10月2日 午後、交流の家でF IWC定例委員会(3カ月毎で次回は12月4日)及び「NPO 法人むすびの家」理事会が行われました。交流の家は竣工後55年、NPO法人になってから19期目に入るそうです。ポチボチ活動を始めたいと思案中。

10月15日 大倭神宮月次祭。

10月23日 大倭大本宮月次祭。密閉を避け窓を開放しつつストープに火が入りました。

この日は昭和42年10月23日月次祭の法話をお聞きました。平成30年10月号『おおやまと』に「みんなと仲良くする」という簡単なことが一番難しい」として掲載分です。

10月24日 午前中、千葉県市川市の中山貴史さんが祖霊祭にお祀りされたご縁の経木を取りに来られました。なお経木は来年1月の大とんどまで拝殿にそのままお預かりしています。

10月31日 衆議院選挙。

11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で呂倭の会。大倭安宿苑では

(菅原園)

10月21日 秋祭り。テラスにかまどを作り炭火で石焼き芋、また交流ホールで焼いたフランクフルト。普段は見ることもない火が燃える様子も目の前で楽し

みました。

(須加宮寮)

10月12日 昼食はホットプレートでお好み焼きでした。

10月21日 火災避難訓練。

10月28日 衆議院選挙の不在者投票を行いました。

10月31日 旧須加宮寮周辺道路の清掃活動を行いました。

(長曾根寮)

10月24日(特養) 紅葉狩りの大判イラストと京都時代祭の照明付き置き物で、フロアを秋の雰囲気にと飾りました。

10月30日(デイ) ハロウィンの置物の作品作り。

(茂毛路園)

10月22日 定例懇談会の参加者9名のうち3名が、昭和14年の同

年生まれてでした。

(八重垣園)

10月25日 昼食は秋の味、松茸御飯と松茸の清し汁でした。

そのまとめ役が大倭とも縁の深い尺八の松本太郎さんが、普段は物静かな太郎さんが、この強烈な個性たちからすばらしいハーモニを引き出していたのが印象的だった。感想を書いた手紙に対して次のような返事を送ってくれた。

《……色々な国の個性を大切にしたいと調和をつくる、そんなモデルを音楽であらわす事が今の私の仕事だと思っています。》

去る10月2日に奈良市ならまちセンターの市民ホールで「吹き打ち歌い弾く」と題したコンサートがあつて参加した。尺八、打楽器、ソウルゴスペルソング、ピアノ、トルコの弦楽器、サズなど、それぞれ第一線で活躍するミュージシャン6人が、見事に共鳴、共振し合い、ダイナミックで刺激的な音楽空間を作り出していた。楽器だけでなく、国籍や出自も多様で個性的だった。

『おおやまと』を毎号楽しみにしております。月に一回、マガツミだらけになった自分の心と向き合う貴重な機会を頂いています。いつも有難うございます。 (T)

日聖祭のご案内 令和3年12月23日(木)

大倭七十八年 元旦
法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。
午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

お願い
今になってもコロナの勢いは予断を許しません。「3密」を避けるべく、引き続き、皆様のご協力をどうぞよろしく
お願い致します。

●恒例の直会演芸会は、今年も中止とさせて頂くこととなりました。
(演芸会担当・中島武宣)

編集後記

▼8頁で定着している『おおやまと』ですが、今月号の「神通力如是」の行数がオーバーしてしまいました。無理に縮めるより頁を増やそうと発想を転換、10頁にすることにしました。驚かれたかもしれませんが、今号のところ今月号だけという予定です。
(春)

あんない

*金鶏祭(大倭神宮)
12月4日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭とは、高千穂勢に対し鳥見側が正に勝鬨を上げんとした時、天に出た光を天啓と悟り矛を収め講和した、「大和」の精神を記念するお祭です。

『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと等を読んだり、聖歌「くこのもと」を歌う時、改めて「和の光」に思いを致しますよう。

*月次祭(大倭神宮)
12月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
12月12日(日) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。

これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*月次祭(大倭神宮)
12月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*日聖祭(大本宮拝殿)
12月23日(木) 大倭元旦。
上の「ご案内」をご覧下さい。
*大倭神宮境内・周辺大掃除
12月26日(日) 午前9時より。有志の皆さんはご参加下さい。昼食は用意されます。